

氏 名	中村 英江
学位の種類	博士(英文学)
学位記番号	文博甲第12号
学位授与の年月日	令和2年3月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 英文学専攻
論文題目	A New Constructional Approach to the English <i>Way</i> Constructions
論文審査委員	主査 准教授 南 佑亮 副査 教授 丸橋 良雄 副査 教授 橋本 礼子 副査 神戸女子大学名誉教授 河上 誓作

論文題目

「A New Constructional Approach to the English Way Constructions」

文学研究科英文学専攻博士後期課程

中村 英江

(要旨)

本論文は、認知言語学とりわけ構文文法理論 (Construction Grammar) の立場から、英語の Way 構文についての多義構造や従来の研究では考慮されていない談話機能や情報構造の解明を試みたものである。

本論文が扱う Way 構文とは、「主語 (Subject) + 動詞 (Verb) + one's way + 斜格 (Oblique)」の形式をもつ節レベルの表現のことであり、動詞が単独で移動を含意するか否かに関わらず、常に主語指示物の「移動」を含意するという特徴がある。Way 構文は多義性を示し、「手段 (means)」と「様態 (manner)」の2つの意味解釈があると言われている。たとえば、“Frank *dug his way* out of the prison. (Goldberg 1995: 199)”の場合、動詞 *dug* が移動の「手段」を表し、「掘り進む」という意味に解釈され、このタイプには「困難性」が含意される。一方、“He *belched his way* out of the restaurant. (Goldberg 1995: 202)”の場合、動詞 *belch* は移動の「様態」を表し、「げっぷをしながら進む」という意味に解釈され、「様態」解釈には「困難性」は含意されるわけではない (Goldberg 1995)。これまでの先行研究において細部に相違はあるものの、Way 構文の意味研究における問題意識は概してこの範囲にとどまっていた。

このような背景に基づき、本論文では以下の3つの問題に取り組んだ。

(A) Way 構文の多義構造の解明

(B) (A)に関連し、Way 構文の選好的言語文脈の明確化と修辭的事態描写の解明

(C) Way 構文の構造[V one's way OBL]がもつ情報構造の解明

問題 (A) においては、先行研究の散逸的な研究を統合し、整理し直すことを試みており、問題 (B) と問題 (C) においては、Way 構文においてこれまでの研究にはない新たな観点から Way 構文の意味特性を分析することを試みている。

第 1 章では、上記 3 つの問題を設定したのち、各章で扱う内容についての概略を述べた。

第 2 章では、まず本論文が立脚する認知言語学の基本的理念および重要概念について説明した。認知言語学の中で重要な位置を占める「意味とは概念化 (conceptualization)」であるというテーゼ、および「用法基盤モデル (usage-based model)」の考え方と、それには「カテゴリー化 (categorization)」の能力が関わっていること、またそれによって特定の言語表現に「多義性 (polysemy)」が生じる基本的なプロセスについて確認した。そしてこれらの基本概念を踏まえ、あらゆるレベルの言語単位が「構文 (construction)」になりうるという本論文が依拠する「構文文法 (Construction Grammar)」の理論的背景について説明した。最後に、本論文が扱う Way 構文においてのこれまでの先行研究について概観し、どの研究も節レベルの分析にとどまっているという先行研究における不十分な点を指摘した。これらのことから、第 1 章で設定した本論文における問題点について、どのように取り組むかという具体案についての概略を述べた。

第3章では、Way構文の多義構造を的確に記述するための道具立てとしてWay構文の意味的特性である「困難性 (difficulty)」を手掛かりに「*manage to* テスト」を提案した。「*manage to* テスト」とは、あるWay構文の事例で得られる意味解釈と同じWay構文を*manage to* 句の補文に埋め込んだ場合に得られる意味解釈とを比較するための一連の手続きのことであり、このテストを利用して、困難性 (difficulty) と意味解釈の関係性の特定を試みた。これは、“manage” は語彙的意味として「困難性」を含むものである上に、結果の含意を伴う (Karttunen 1971) という性質を利用している。Way構文の多義構造を構成する意義 (senses) については、影山・由本 (1997) の3つの分類 (「移動の様態」、「通路の作成 (「手段」解釈 (Goldberg 1995) に相当)」、「移動の随伴動作 (「様態」解釈 (Goldberg 1995) に相当)」) に従い、Goldberg (1995) の2分類と比較しながら、「*manage to* テスト」を用いた検証を行った。その結果、①「移動の様態」タイプは実は「手段」と「様態」に解釈されるものが混在しており、「困難性」の有無だけでは分類できないタイプである、②Goldberg (1995) の示す「様態」は影山・由本 (1997) の「移動の様態」と「移動の随伴動作」が下位分類され、「移動の随伴動作」は「困難性」が加わると「様態」解釈が「手段」解釈へと強制 (coerce) される特徴がある、という2点を明らかにし、Way構文の多義構造は非常に動的 (dynamic) なものであり、また使用文脈によって解釈が変化するものであると主張した。

第4章では、第3章における検証結果に基づき、*slide one's way* 構文 (動詞 *slide* を伴うWay構文) を分析した。動詞 *slide* は、動詞そのものが移動を含意し「スムーズに進む」というWay構文の持つ「困難性」の意味と相反する意味を伴う。Goldberg (1995) では、移動を含意するよう

な動詞タイプが生起する Way 構文は想定されておらず、また高見・久野 (2002) においても Way 構文に生起可能な様々な動詞タイプを挙げ、Way 構文の使用条件としての機能的意味制約も挙げてはいるが、動詞 *slide* のような動詞が生起する Way 構文においては見過ごされていた。本章ではコーパス (*The Corpus of Contemporary American English*、以下 COCA) から抽出した事例を詳細に検証することで、次の 4 つの特徴 (①移動は「困難性」を含意するが、単に移動そのものを表すだけではなく、主語指示物が移動する際の体の一部の活動の方法を示すために動詞 *slide* が使用されている場合がある、②移動は「困難性」を含意せず、動詞 *slide* で表される移動は語彙的意味そのものが解釈される、③「困難性」の有無に関して、常に一定の解釈がなされるわけではなく、話し手や聞き手の解釈によって変化する、④移動事態描写が比喩的に使用されている) が明らかになった。Goldberg (1995) では、動詞の語彙的意味に対する「構文」の意味の優位性だけが強調されているが、本章における *slide one's way* 構文の分析結果は「構文」の意味は Goldberg が想定したものよりさらに柔軟性のあるものであり、Way 構文が使用されている文脈に依存して様々に変動するものであることを明らかにした。

第 5 章では、*make one's way* 構文 (動詞が *make* である *one's way* 構文) が用いられる言語的文脈を COCA で詳細に調査し、*make one's way* 構文が *as* 節の従属節に好んで使用されるという事実を示した。このような事実から、図と地 (Figure/Ground) の観点を取り入れた分析を試みた。図と地 (Figure/Ground) の観点から、複文構造に現れる主節と従属節の事象間の関係を、従属節が地 (Ground) を、主節が図 (Figure) をそれぞれ反映するという Talmy (1978) の考え方に基づき、本章では Way 構文に主節と従属節を反転するテスト (cf. Hayase 1997) を実施した。この

検証の結果、Way 構文のような時間幅をもつ構文が図 (Figure) としての役割を担うことができないことが判明し、①Way 構文は *as* 節の従属節を好み、②Way 構文の描く移動事象は俯瞰的に事象の捉え方を反映したものであることを示した。本節において、Way 構文が地 (Ground) としての特性をもつという事実が明らかになったのは、「視点」という観点も取り入れたためであり、Way 構文の事象描写における新たな特徴を明確にできた。このことから Way 構文には Goldberg (1995)などが実践している単純節 (simple-clause) レベルの分析では不十分であり、使用文脈も「構文」の分析対象とすることの重要性が明らかになった。

第 6 章では第 5 章と似た観点に立ちながら、Way 構文の修辭的な機能も分析した。Way 構文が表す移動事象についての意味解釈や制約については多くの先行研究でなされてきたが、その一方で修辭的観点からの分析は限られており (外山 1968, 大室 2000)、例えば大室 (2000) は、Way 構文は話者によって「意識的に使用される」という特徴に言及しているが、Way 構文に生起する動詞タイプについての分析にとどまっており、談話的機能や生起文脈には関心が向けられていない。これに対し本章では、第 5 章で扱った *make one's way* 構文に加え、Way 構文に生起頻度が高く広義の「様態」を明確に表す動詞である *push* と *pick* による Way 構文 (*push one's way* 構文と *pick one's way* 構文) に射程範囲を広げ、COCA からのデータに基づき、その事態描写の特徴を談話上の修辭性 (レトリック) の観点から分析した。その結果、Way 構文は単独で自律的に完結した移動事象描写をするのではなく、その事態内で生じた別の出来事 of 存在を聞き手に想起させるという機能を担うこと、つまり、単一の移動事象を表すのではなく、複数の視点による移動事象の捉え方 (construal) を反映し、この特徴により、他の事態描写構文には見られない独特の修

辞性が伴うことを明らかにした。この結果により、第 5 章と同様に、Way 構文は節レベルの意味を超えた単位を想定して分析する必要のある構文現象であると結論付けた。

第 7 章では、情報構造の観点から Way 構文を分析した。Way 構文は「移動の経路」と「移動の様態」の 2 つの情報を伝達しており、英語は「様態 (manner)」の情報が際立ちやすい特徴がある、という Szczesniak (2013) の見解を出発点とし、Way 構文の述部である [V one's way OBL] を動詞 [V] (様態) と、経路と結果句を指す [one's way OBL] (移動) の 2 つの部分のどちらが際立つ情報 (主張) 情報でどちらが背景化された情報 (前提) として認識されるかという検証を試みた。具体的には、前提は否定の対象にはならないという性質を利用し、対象とする Way 構文の実例を否定文に変え、意図する否定の対象が移動経路の場合と移動様態の場合の 2 つの文脈を設定し、どちらがより自然な文脈として適合するかを母語話者に判定してもらうという手続きを用いた。その結果、様態が常に際立ちを得るわけではなく、移動経路が物理的なものではなく抽象的なもの場合は、動詞が明確に移動の様態を描く類のものであったとしても、移動経路の方がより際立つということが判明した。この一見すると不可思議な現象については、経路が抽象的になれば特定の解釈 (construal) によって聞き手が概念レベルで経路を創り出さなくてはならないため、経路が焦点となりやすくなる、という聞き手の解釈過程を考慮した談話レベルでの説明が有効であることを主張した。

第 8 章の結論では、本論文の 3 つの目的がいかに関達成されたかを述べている。そして Way 構文という構文の現象としての意味と機能を十分に明らかにするには文脈や談話参与者 (話し手・聞き手) という、命題レベルにとどまらない諸要因も考慮しなければならないことを明らかにし

た本研究は、動詞の項構造構文の研究の在り方に新たな一石を投じるものであることを述べた。

審査結果の要旨

中村英江氏は、課程博士論文“A New Approach to the English *Way* Constructions”を本年度の12月に提出した。すべて英文で執筆され、目次・引用参考資料・索引も含めて総頁数は146頁であり、導入と結論を含めて全8章から成り立っている。研究の対象は英語の*Way*構文という、特にその意味機能に関しては研究の蓄積が少なく分析が困難な、謎の多い言語現象である。中村氏は本学大学院博士後期課程に在籍中、一貫してこの構文現象の研究に取り組み、独創的な視点と方法でこの構文に関する新たな事実をいくつも明らかにしてきた。本論文はその一連の研究成果の集大成である。

本論文の評価すべき点は3つにまとめられる。第一に、第3章および第4章において、*Way*構文の多義構造に関するこれまでの研究をさらに前進させる方法を提案したことである。*Way*構文が多義的であり、2種類の解釈があり得る構文であることは半世紀以上も前からOtto Jespersenなども指摘していたことであつたが、90年代後半に入ってから、解釈が3種類存在するという見解も出された。この2つの見解の関係を明らかにするために、本論文では「困難性の含意」(Goldberg 1995)という意味的要因の重要性に着目し、これを特定するための緻密な手続きに基づくmanage toテストという検証方法を提案し、2つの立場の関係を巧みに可視化している。またこの過程で、この構文が描く移動事象の意味が構文文法理論において暗黙のうちに想定されていたよりも大きく文脈に依存するものであることも明らかにしている。この点を踏まえ、第4章では特定の動詞(slide)について、その意味解釈の多様さを詳細に記述するという意欲的な試みがなされている。

評価すべき第二点目は、特に第5章から第7章において、先行研究における暗黙の前提を根本から問い直すことで得られた全く新しい視点から*Way*構文の未知の諸特徴を明らかにし、構文文法理論にも重要な貢献をもたらしていることである。第5章では、大規模コーパスから収集した膨大な事例の詳細な観察を通して、高い頻度で*Way*構文は複数の節を伴う文を好み、とりわけasによって導かれる従属節や分詞節として出現するという傾向を発見し、これに対して、認知言語学で提案されている説明概念も援用しながら新しいタイプの分析を提示している。これは、従来の項構造構文の研究に根強く残る「当該構文のみで構成された単独の節レベルの意味構造のみを想定して研究を進める」という慣例に対して疑問を投げかけるものである。第6章では、第5章の知見を踏襲しつつ、聞き手の解釈過程という要因を考慮に入れることで、「ひねり」「意識的使用」「修辞性」といった漠然とした言葉で語られてきた*Way*構文に特有の機能に対するより客観性の高い分析の可能性を提示している。以上2つの成果は、「構文」という単位をどのように設定するかという構文文法理論にとってきわめて重要な問題に直結していることも特筆に値する。最後に第7章は、情報構造の観点から*Way*構文を分析しているが、これは全く前例のない画期的な試みであるのみならず、描かれる経路概念が抽象的か否かという違いがこの構文の示す情報構造のあ

り方と関連するという予想外の事実を明らかにしている。これは Way 構文という個別現象の解明にとどまらず、理論言語学において常々問題となる意味論と語用論の関係についても重要な示唆を与える研究成果となっている。

第三点目は、本論文の研究成果が、Way 構文という特定の言語現象の解明という枠にとどまらず、今後の研究材料となる様々な新しい課題を生み出していることである。まず、第 5 章と第 6 章で明らかにされた Way 構文（厳密には Way 構文のいくつかの下位構文）が as 従属節に好んで現れるという事実は、「なぜ他の従属接続詞ではなく as が Way 構文に好まれるのか」という、従属接続詞の研究にとっても興味深い問題を提供している。また、本論文ではあまり強調されていないが、Way 構文についてはその歴史的発達に関する研究があり (Israel 1996, Fanego 2018 等)、そこでの問題意識も、やはり生起可能な動詞の生産性の拡大や自動詞移動構文との比較といった、本論文が指摘する「単純節(simple-clause)レベル」に限定されている。本論文が提示した節レベルを超えるという新しい視点は、こうした研究にも少なからぬ影響をもたらすことが期待できる。

ただし、本論文には問題点も見られる。第一に、前半（第 3 章・第 4 章）と後半（第 6 章・第 7 章）では、動詞の担う情報としての「様態(manner)」が異なる意味で使用されている。この違いについては個々の分析の目的の違いから推論できるものではあるが、「様態」と「手段」という 2 つの概念の関係も含め、何らかの明示的な説明が必要であったと思われる。第二に、構文文法理論に依拠した研究でありながら、構文となる言語単位の規模に関する点に心が集中し、構文の抽象度(schematicity)の問題の検討が手薄になっているという点が挙げられる。第 5 章と第 6 章では動詞が指定された具体性の高い下位レベルの構文 (make one's way 構文、pick one's way 構文、push one's way 構文) の存在を想定した分析をおこなっている以上、本論文のタイトルで *Way Constructions* と複数形が用いられていることの意味も含め、この問題にかかわる本論文の立場を明らかにする議論がなされるべきところである。

以上のような問題は多少残るものの、総合的に判断して、本論文が達成した学問的独創性と研究領域への貢献度はいささかも減じるものでないことは言うまでもない。

よって本論文審査委員会は、本論文を博士（英文学）としてふさわしい論文であると判断する。

試問結果の要旨

本論文についての公開口頭試問は、本学教職員、非常勤講師等 11 名の出席のもとに、令和 2 年 2 月 3 日（月）の 12 時 30 分から約 2 時間 15 分にわたって行われた。最初の 70 分程度は論文の概要についてパワーポイントを用いて説明があり、その後十分な時間をかけて論文細部にまで及ぶ質疑応答が 4 名の審査委員との間で活発に行われた。論者の応答は的確であり、残された課題に関しても十分な理解を示し、今後の展望についての積極的な意欲を確認することができた。以上のように、口頭試問の結果は満足すべきものであった。

学力確認の結果の要旨

申請者、中村英江氏は平成 21 年 4 月に神戸女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程に入学し、平成 23 年 3 月に同課程を修了、平成 23 年 4 月に同じく神戸女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程に進学し、現在に至っている。後期課程在籍中に全国レベルの学会で 3 度の研究発表を経験し、査読付き論文の執筆経験もあり、本学および他大学において英語科目の非常勤講師も 5 年近く勤めている。これに加え、上記の公開口頭試問の結果が満足すべきものであったことから、あらためての学力確認の試験は不要であると判断した。

学位授与の可否に関する意見

以上の所見により、本論文は博士（英文学）の学位を授与するに値すると認められる。